

〔論文〕

# 看護基礎教育における社会人基礎力育成に関する研究の動向

高木 みどり  
Midori Takagi

大阪総合保育大学大学院  
児童保育研究科 児童保育専攻

本研究の目的は、看護基礎教育の社会人基礎力育成に関する研究についてどのような知見が蓄積されているのかその動向と課題について整理し研究動向を知ることであった。その結果、学年が上がるごとに人とのかわりが増えることで社会人基礎力の向上が見られ、さらに実習や学習内容など何らかの取り組みをすることで一定の効果はあることがわかった。しかしながらすべての社会人基礎力の能力要素において学習や実習期間だけでは一定の能力要素を高めることは難しいことが示唆された。そのため、社会人基礎力育成を意図した学習や実習方法を考えることが必要である。今回経済産業省の「人生100年時代の社会人基礎力」や文献レビューから看護基礎教育で社会人基礎力育成のための教育方法を検討した。

キーワード：看護基礎教育、社会人基礎力育成

## 1. はじめに

本研究は、看護基礎教育における社会人基礎力をどのように高めていくかを問題意識として文献レビューをまとめたものである。看護大学に入学する学生は、将来看護師になりたいという目的意識を明確に持った学生がいる。一方で、周囲の勧めで漠然と憧れて入学してくる学生もいる。中野ら(2017)は、進路を決定するにあたり強く影響した人物は、大学生・養成所の学生とも「母親」が一番多く50%以上を占めていると報告している。また、看護系の大学・短大等が増えたことで、目的意識のみならず学力にも幅が生まれ、多様な学生を看護師として育成することが看護大学・短大等に求められている。さらには、あいさつを含め社会人としてのマナーやスキルといったことや他者とのコミュニケーション力、主体性など看護の専門知識以外の醸成も担う必要性が生まれてきている。

2006年に経済産業省は、社会人基礎力を発信した。これは「前に踏み出す力(主体性、働きかけ力、実行力)」「考え抜く力(課題発見力、計画力、想像力)」「チームで働く力(発信力、傾聴力、柔軟力、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力)」の3つの要素と12の能力要素から構成されており「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」であるとされている。いわゆる専門的な知識を学生時代に身につけるだけでなく、さまざまな職場で多様な人と関わりながら社会人として仕事を進めるにあつ

て、主体的に物事に取り組む力、課題発見をしながら考えて解決していく力、他者とコミュニケーションを取りながらチームとして取り組んでいくための力の育成が必要であるとの産業界の問題意識から経済産業省が取りまとめたのが「社会人基礎力」である。しかし人生100年時代や第4次産業革命の元でその重要性は増している一方で「人生100年時代」ならではの切り口の視点の必要性から、2017年に新たに3つの視点(どう活躍するのか、どのように学ぶのか、何を学ぶのか)を加えて「人生100年時代の社会人基礎力」を発信した。その定義は、これ以上長くなる個人の企業・組織・社会との関りの中で、ライフステージの各段階で活躍し続けるために求められる力とされている。さらに2006年の社会人基礎力の3つの能力/12の能力要素を内容としつつ、能力を発揮するにあたって、自己を認識してリフレクション(振り返り)しながら、目的、学び、統合のバランスを図ることが、自らキャリアを切りひらいていく上で必要と位置づけられている。新たな3つの視点の位置づけ「学び」とは、学び続けることから自らの強みを強化すること、弱みを補充し発揮する力として「考え抜く力」が重要となり、「統合」とは、自らの視野を広げ、多様な体験・経験や能力と人々の特異なものを組み合わせ、目的の実現に向け統合することで「考え抜く力」や「チームで働く力」が重要となる。また、「目的」とは、自己実現や社会貢献に向けて行動することで、価値の創出に向けた行動を促す力として「前に踏み出す力」が重要であると位置づけている(図1)。これら3つの視点

のバランスを続けることで、変化する社会の中で自らの立ち位置が相対化され「キャリア・オーナーシップ」を個々が定めることに繋がると報告している。背景には、学生から社会人へとスムーズに移行することや、ライフステージのおおのこの段階で活躍し続けるために求められる力とされている。

公益社団法人 経済同友会 (2015) によると、企業が求める人材像と必要な資質能力は、変化の激しい社会で課題を見出し、チームで協力して解決する力 (課題設定力・解決力)、困難から逃げずにそれに向き合い乗り越える力 (耐力・胆力)、多様性を尊重し、異文化を受け入れながら組織力を高める力、価値観の異なる相手とも双方向で真摯に学び合う対話力 (コミュニケーション能力) と指摘している。その一方、学生が持つ心の構造や社会環境、将来に対する不安など様々な課題が指摘されている。川上 (2013) は、現在学生の特徴は変化し、複雑・多様化している。特に顕著な特徴として「悩めない大学生」、「身体化」、「心の多面化・断片的」、「親子関係の密着」、「休・退学者の増加」、「巣立ってない大学生」等が見受けられると述べている。以上のことから、現在社会で求められている人材と大きな乖離があると考えられる。看護基礎教育の現場でも授業の進め方や実習で社会人基礎力の取り組みはされている。看護実践は、「看護を行う側・看護をされる側」の関係性の中で行われる。看護の知識・技術のみならず、チームワーク力、考える力、自己理解・他者理解、コミュニケーションを円滑にできる能力、情報収集力や問題解決能力等が求められる。専門知識や技術は重要不可欠ではあるが、社会で生き抜くための必要な力は、特に意識的に育成する必要性が期待されている。

現在までの社会人基礎力に関する研究は 2006 年以降増加しており、看護基礎教育の社会人基礎力育成においても 2006 年以降増加してきている。これは 2006 年に経

済産業省が発信したのをきっかけに看護基礎教育で求める卒業時の実践能力と臨床が期待する実践能力の人材の育成に関する乖離が問題とされ意識化されたものであると考える。

そこで本研究の目的は、文献レビューを行い、看護基礎教育の社会人基礎力に関する研究の現状に即した社会人基礎力の教育プログラムを検討する基礎資料とする。また、社会人基礎力に関する国内の先行研究の動向を探索し、どのような知見があるのか知ることで現状の課題と展望を明らかにし、さらに看護基礎教育で社会人基礎力育成のための教育方法を検討することである。なお、本研究での「看護基礎教育」は、大学・短大等の看護系学部・学科の教育段階で行われるものを指すこととし、その教育段階の学生へどのように社会人基礎力育成の教育を行っているか、あるいは社会人基礎力の中でどのような点が学生時代に育ちやすいのかの視点で文献レビューを行う。

## II. 研究方法

文献レビューを行うにあたり、2 段階の調査を行った。第 1 段階は、1990 年～2020 年の 30 年間の「社会人基礎力」が含まれる文献の調査を行った。文献の検索にあたり、国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (以下「CINII」) 及び、国内医学論文情報のインターネット検索サービス医学中央雑誌 (以下「医中誌」) を用いて、Keyword で「社会人基礎力」のみの場合と「看護基礎教育 and 社会人基礎力」の 2 つの場合で検索を行い、表 1 にその結果をまとめた。

第 2 段階は表 1 の中の 2016～2020 年の 5 年間の文献を分析した。「看護基礎教育 and 社会人基礎力」の Keyword では 142 件 (CINII: 12 件、医中誌: 130 件) が該当するが、分析対象を絞るために原著論文のみ対象

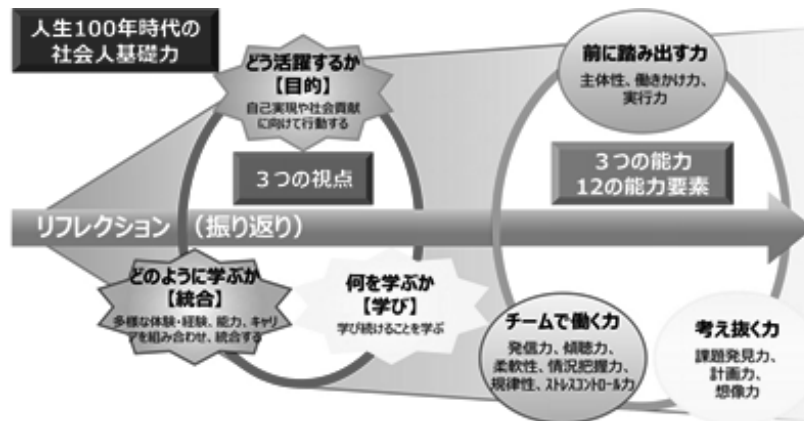


図1 経産省「人生100年時代の社会人基礎力」から抜粋

とし、研究報告、総説、会議録、学術論文でないもの(雑誌記事)を対象外とした。さらに、原著論文ではあるものの、看護基礎教育での社会人基礎力の具体的内容の記述がないもの(社会人基礎力という用語に触れている程度のもの)や、すでに社会人として医療現場で働いている看護師の社会人基礎力(学生対象としたものではないもの)についても除外した。

また、142件中CINII及び医中誌の双方に検索結果として挙がっているものもあったため、最終的に抽出した分析対象文献は10件(CINII:1件、医中誌:9件)となった。これらのすべての文献を入手して分析を行った。

分析の視点としては、とくに「どのような取り組みを行ったのか/それが社会人基礎力のどのような項目に影響をしたのか」という点、また「社会人基礎力の実態把握としてどのような調査を行ったのか」という点に着目し、対象とした文献から社会人基礎力向上に関しての経緯とその効果について検討した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 社会人基礎力に関する研究(表1)

2006年以降、社会人基礎力に関する研究は増加している。2005年以前は「社会人基礎力」、「看護基礎教育 and 社会人基礎力」のキーワードの検索では0件であったが、2006年以降「社会人基礎力」のキーワードの検索で一気に増加している。「看護基礎教育 and 社会人基礎力」においても、2011年から急激に増加が見られている。

#### 2. 看護基礎教育における社会人基礎力に関する研究(表2)

看護基礎教育で社会人基礎力に関する研究の内容は、(1) 臨地実習前後の比較2件、(2) 学年別比較3件、(3) 基礎ゼミや授業後の変化2件、(4) アルバイトの

経験から得られるものについての検討1件、(5) 地域包括ケアシステムに対応できる看護師を育成する教授内容の文献検討1件、(6) 社会人基礎力と職業的アイデンティティ及び臨地実習自己効力感の関連1件であった。

#### (1) 臨地実習前後の比較を行った文献

2年次生の基礎看護学実習前後の比較を行った文献4では、5つの社会人基礎力「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」「倫理力」「コミュニケーション力」の平均値の実習前後を検定した結果、すべて実習後に有意に上昇していたと述べている。その中でも、「考え抜く力」と「前に踏み出す力」は特に上昇し、「チームで働く力」と「倫理力」は実習後さらに向上していた。また「コミュニケーション力」と他の社会人基礎力の関係では、実習前には「コミュニケーション力」と社会人基礎力に有意な相関がみられていたが、実習後は、相関が得られない、もしくは弱くなった。それらのことから「コミュニケーション力」は必ずしも社会人基礎力を上昇させる要因ではないと指摘している。統合看護学実習の社会人基礎力と実践場面との関連を実習前後で比較調査した文献8は、社会人基礎力は4つの能力「アクション」「シンキング」「チームワーク」「倫理」のすべてが実習後に上昇した。しかし、「規律性」「ストレスコントロール力」は低下した。統合看護学実習は、学生自身が実習テーマにより自主的かつ主体的に行動できることで、その行動が起因となって多岐にわたる実践場面を体験することが可能であり社会人基礎力を高めることができると述べている。

#### (2) 学年別比較を行った文献

社会人基礎力と4年間の経年的変化の影響を及ぼした大学生活の経験要因を明らかにした文献3は、社会人基礎力は2年次にいったん低下した後、4年次にかけて高まる傾向がみられた。特にシンキングとチームワーク

表1 社会人基礎力と看護基礎教育と社会人基礎力の年代による分類

	CINII		医中誌	
	社会人基礎力	看護基礎教育 and 社会人基礎力	社会人基礎力	看護基礎教育 and 社会人基礎力
～1990年	0件	0件	0件	0件
1991～2000年	0件	0件	0件	0件
2001～2005年	0件	0件	0件	0件
2006～2010年	181件	0件	5件	1件
2011～2015年	390件	3件	88件	184件
2016～2020年	423件	12件	204件	130件

看護基礎教育における社会人基礎力育成に関する研究の動向

表2 看護基礎教育における社会人基礎力に関する研究  
(年度順、発行年代があたらしいもの順)

文献番号	著者名(発行年)	論文タイトル	調査方法	影響した項目
1	田中理子、他(2020)	看護学生の臨地実習自己感及び職業的アイデンティティと社会人基礎力の関連	臨地実習終了後の学生に「社会人基礎力」「職業的アイデンティティ」「臨地実習自己効力感」の各尺度の調査	職業的アイデンティティの「自分の医療職観の確立」と臨地実習自己効力感の「対象の理解・援助効力感」は社会人基礎力を高める要素である。臨地実習自己効力感は職業的アイデンティティを経て社会人基礎力に間接効果も及ぼす。
2	新野由子、他(2019)	看護学士課程1年生の社会人基礎力の変化(第1報) - 初年度時の教育の基礎ゼミを通して -	看護学士課程1年生を対象に「基礎ゼミ」を通じた主体的学習による検証	「前に踏み出す力」の主体性、働きかけ、実行力のすべての項目、「考え抜く力」の課題発見力、計画力、創造力のすべての項目、「チームで働く力」の発信力、柔軟性、状況把握力の3項目に有意差が見られた。「チームで働く力」の傾聴力、規律性、ストレスコントロール力の3項目は有意差が見られなかった。
3	奥田玲子、他(2019)	看護学生の社会人基礎力の経年的変化と影響を及ぼす経験要因	看護学専攻に入学した1年次から4年次までの縦断調査	社会人基礎力は2年次にいったん低下した後、4年次にかけて高まる傾向が見られシンキングとチームワークにおいて4年次の得点が有意に高かった。
4	山本幸子、他(2019)	看護学臨地実習が社会人基礎力に影響を及ぼす要因	基礎看護学実習前後の変化を質問紙調査	5つの社会人基礎力「前に踏み出す力」「考え抜く力」チームで働く力」「倫理力」「コミュニケーション力」のすべて実習後で有意に上昇していた。実習前の「コミュニケーション能力」は社会人基礎力に影響を及ぼしていると考えられたが、実習後は相関が弱かった。
5	市川裕美子、他(2018)	看護学生の社会人基礎力の学年別自己評価と変化	短期大学看護学科の1年生に社会人基礎力能力評価表を用いて6月と1月に調査	傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性は全学年、前期・後期ともに3.0以上であったが、働きかけ力、創造力、発信力は低かった。
6	滝島紀子、他(2018)	地域包括ケアシステムに対応できる看護師の育成に必要なと考える教授内容 - 基礎看護学領域に焦点を当てて -	文献レビューから教授内容を明らかにする	特に在宅看護では「自律性」とともに社会人基礎力をも育成していく必要性が明らかになった
7	小島尚子、他(2017)	看護系大学生の社会人基礎力の属性別の検討	看護学生の社会人基礎力を問う36項目の質問紙調査	1・4年次生間で社会人基礎力に有意な差はなかった。「チームワーク」の規律性が高く、「アクション」の働きかけ力、「シンキング」の計画力、創造力が低かった。
8	山本十三代、他(2017)	在宅看護領域における統合看護学実習前後の「社会人基礎力」の変化と実践場面との関連	総合看護学実習(在宅)を終了した学生「社会人基礎力」の13の能力要素と実践場面の関連をコンソポンデンス分析により検討	前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力、倫理の4項目は実習終了後に上昇。規律性、ストレスコントロール力は、実習終了後に減少した。
9	宮部(森山)明美、他(2016)	看護専門科目におけるPBL-T・TBL混合型教育プログラムの評価	成人看護学(急性期)の科目でPBL-T・TBL混合型教育プログラムの評価	論理的思考への自信やシンキング、課題を解決するスキルの向上に影響があった。またPBL-Tにおける習熟度別グループやTBLを組み合わせた授業は、主体的な学びを促進する働きかけとして有効であった。
10	若杉早苗、他(2016)	看護学部学生の学業とアルバイトに関する実態調査	アルバイト実施の実態と学業への影響を把握	1年次は「前に踏み出す力」の働きかけ力を身につけており、2年次は「考え抜く力」の課題発見力の向上、3・4年次は「チームで働く力」の発信力、柔軟性、状況把握力などを得ていた。

においては得点が有意に高いことが示されたと述べている。また、学習活動は社会人基礎力の「アクション」「シンキング」「チームワーク」に影響し、課外活動・私的活動は「アクション」「チームワーク」に影響していた。また学年別自己評価を行った文献5は、短期大学生1年生から3年生までの社会人基礎能力評価表を用い調査をした結果、学年毎の前期と後期では全学年において後期の自己評価が有意に高かった。1年生が最も上昇し、2・3年生も上昇したが2年生の平均が低い傾向であった。能力毎では、「チームワーク」「アクション」「シンキング」の順で得点が高かった。12要素と倫理性を加えた13の能力要素では、「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」は概ね全学年、前期・後期ともに高く、「働きかけ力」「創造力」「発信力」が低かった。前期・後期で有意のある能力要素は、「実行力」「課題発見力」「計画力」「創造力」「発信力」「柔軟性」「情報把握力」「倫理性」であったと述べている。

1年生と4年生の社会人基礎力の属性別の相違を調査した文献7によると入学後日が浅い1年次と4年次生間で3能力と総合の社会人基礎力ともに有意差が認められず、平均順位にも大きな違いはなかったと述べている。また、両学年とも「チームワーク」の「規律性」が特に高く、「アクション」の「働きかけ力」「シンキング」の「計画性」「想像力」が低かったと報告された。

### (3) 基礎ゼミや授業後の変化を検証した文献

初年度時の基礎ゼミ（1年前期）を履修後の社会人基礎力の変化を検証した文献2は、基礎ゼミを社会人基礎力育成のプログラムのひとつと位置づけそれを実施し、社会人基礎力の評価シート（経産省）を用いて前後の比較を行い分析した。その結果、基礎ゼミ前より得点が高かった。12の能力要素では「前に踏み出す力」の「主体性」「働きかけ力」「実行力」のすべて、「考え抜く力」の「課題発見力」「計画力」「創造力」のすべて、チームで働く力の「発信力」「柔軟性」「状況把握力」の3項目に有意差がみられた。また、「チームで働く力」の「傾聴力」「規律性」「ストレスコントロール力」の3項目は有意差がなかったと述べている。少人数グループでの具体的な課題について調べてまとめるという基礎ゼミの方法や達成目標が、グループの主体性や対話を促し、社会人基礎力を上げたと説明している。

PBL-T（全3回セッション）・TBL（全3回セッション）混合型授業前後の評価を行った文献9は、批判的思考態度尺度、社会人基礎力、独自に作成したグループ学習による課題解決能力の自己評価項目で調査をした。その中の社会人基礎力の「シンキング」において授業開始

前より優位に上昇がみられたと述べている。一方で「アクション」「チームワーク」は、有意差は見られず、低下している項目があったと報告している。PBL-T・TBLはチームで課題を解決するため論理的思考の自覚や新しい発想を生み出す力は短期間でも効果があると説明している。

### (4) アルバイトの経験から得られるものの調査を行った文献

看護学部学生とアルバイトの実態調査の行った文献10は、アルバイトの経験は社会人基礎力を増すと示している。人との関りや接遇コミュニケーションの取り方などの前に踏み出す力、周囲状況の観察力、情報の取り扱い、仕事の効率などの考え抜く力、上下関係、気遣い、言葉使い、他職種の様子を見るなどチームで働く力など社会人基礎力の向上につながっていると述べている。社会人基礎力の3つの能力と12の能力要素では、1年生は「アクション」のうち「働きかけ力」、2年生は「考え抜く力」の「課題発見力」、3・4年生は「チームで働く力」の「発信力」「柔軟性」「状況把握力」を得ている実態が確認できたと報告している。

### (5) その他

次の2つの文献は、何らかのプログラムを実施した結果、社会人基礎力の向上が見られたというものではないが、看護学生を対象とした社会人基礎力を扱った論文として紹介する。文献6は、地域包括ケアシステムに対応できる看護師の育成を基礎看護学実習に焦点を当てた文献レビューから教授内容を明らかにしている。在宅看護では、「自立性」が重要になり教授するにあたり「自立性」「前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力」なども育成していくことが必要であると述べている。また、文献1によると、臨地実習自己効力感は社会人基礎力に直接影響を及ぼすとともに職業的アイデンティティ形成を経て間接的に影響を及ぼしていた。職業的アイデンティティの「自分の医療職観の確立」は、アクションの「主体性」、シンキングの「計画性」とチームワークの「規律性」に影響していた。理想の看護像を明確にし、看護観を形成することは、社会人基礎力全般を高めるために有用であると指摘している。

## IV. 考察

### 1. 看護学生を対象とした社会人基礎力育成

看護学生を対象とした社会人基礎力育成では、学年別に比較していた文献3は、4年生は高く2年生ではいっ

たん低下しており、文献5の短大での調査でも3年生は高く、1年生より2年生の方が低い傾向がみられた。どちらも中学年での低下が見られている。これについて文献5では、学年が進むごとに難易度も増し、自分の能力や課題解決が思うように行かず自己評価が低くなるものが影響していると指摘している。入学時に比べ周りの環境に慣れ緊張感がほぐれることや学習内容も難易度が増していき課題等に時間がかかったりすることで自信がなくなっていくのも要因になっていると推測する。一方、最終学年で再度上昇している。学内とは違う環境での臨地実習を経て、問題解決や他者理解、また人との関わりが増したことなど様々な経験や体験をしたことで社会人基礎力の向上につながったのではないかと考える。文献7の研究では、1年次と4年次では3つの能力・総合の社会人基礎力共に有意差がなかった。原因として同年代での経験が影響している可能性があるという指摘している。以上のことから、学年が上がるほど多様な経験を重ねていることが上昇につながっていると必ずしも言えず個々が社会や人とどう関わり体験を重ねているのかが、社会人基礎力を向上させるために重要であると考え。近年、子どもの生活環境は変化し地域や家庭での生活体験の減少やコンピューターなど人と関わらなくても情報が手に入るため社会に出たときに必要である活動する力を養う機会が減少していると考え。しかし、看護師を目指すためには対象者が人であり必ず関わる必要性があり、専門知識や技術だけでなく社会人としての成長も期待される。また、文献5は、3つの能力では、「チームワーク」「アクション」「シンキング」の順であり、12要素別では、「傾聴力」「規律性」「柔軟性」「状況把握力」の順で高く、「発信力」「想像力」「働きかけ」が低下していたと報告している。看護はチームで活動しているためこれまで学んできた学習や学内演習などから学んできたと推測する。しかし、「チームワーク」の中の「発信力」が低下していることから、相手の話を傾聴し柔軟性を持ち対応でき状況の理解はできるが、自らの意見を相手に伝えることが苦手であり声掛けがなければ受け身の状態であると考え。山下(2017)は、自分の意見を的確に伝え、意見や立場の異なるメンバーも尊重した上で、目標に向けともに協力することが必要であると述べている。そのためには、演習や学習内での工夫や継続教育の必要性が示唆された。また、臨地実習前後では、3つの能力が上昇されている。臨地実習では受け持ちの方とのコミュニケーションから情報を取ることから始まり、問題点を解決するための看護実践を行い、評価を行う。その過程には3つの能力すべてが必要であり、かつ他者理解、自己理解、倫理観が必要であると考え

る。文献8の研究では、実習後に「チームワーク力」の「規律性」、「ストレスコントロール力」が低下したと述べている。これに対し、自らの行動だけでなく周囲の影響を考えて、責任ある規範となる行動をとることの困難さを感じたのではないかと指摘している。社会のルールや他者との約束、他人に迷惑をかけないなど幼少期からの成長過程で他者との関係性の稀薄性が推測される。

以上のことをまとめると、学年が上がるだけではなくアルバイトなどの社会や実習やグループワークなど人との関わりを経験することが社会人基礎力の向上につながるということが考えられる。すなわち、学生たちにとって講義を通しての専門知識の獲得だけでなく、学校外のアルバイト等の経験、学校外での実習、学校内の演習等におけるグループワーク等の「人との関わり」を体験・経験を通じた学びが社会人基礎力の育ちに影響を与えることが示唆される。また内閣府(平成16年)の少子化社会白書によると、子どものいる世帯やきょうだい、子ども自体の減少は、子ども同士が、切磋琢磨し社会性を育みながら成長していくという機会を減少させ、自立した、たくましい若者へと育てていくことをより困難にする可能性がある。現に、核家族化の進展や地域社会の崩壊が、人間関係やコミュニケーションの不足による児童や家庭の多くの問題を発生させてきたとの指摘がある。また、子ども同士がふれあう機会の減少や、子どもたちが赤ちゃんと接する機会が減少していることも、親となつてからの子育てに対して様々な面でマイナスの影響を及ぼしているのではないかと考えられると報告している。現在の日本では、大家族がなくなり核家族化したことで家庭教育や地域活動などあらゆる面で社会人基礎力を弱めている。さらに学校教育では、成績や受験のための学習が中心となり、子ども同士の関わりはSNSを通じてのコミュニケーションなど社会や人との関係性の変化から一昔前までの自然と身につくことがなくなっていると推測される。

そのため、看護基礎教育として「人との関わり」を意識的に取り入れた教育を行うことによって、社会人基礎力育成に資すると言えよう。今回文献レビューではいくつかの授業実践の工夫が示されているので、それを参考に何らかの研修や学習を通じての取り組みを行うことで、社会人基礎力向上の一定効果はあると想定する。

## 2. 2017年度の「人生100年時代の社会人基礎力」の視点からの検討

経済産業省中小企業庁は(平成30年3月)に、2017年の「人生100年時代の社会人基礎力」の新たな3つの視点の「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「どう活躍す

るか」が追加され、その中の「何を学ぶか」では、必要に応じてアップデートする必要がある。さらに日々の経験や他者との関わりの中から学ぶことが重要であり、また定期的に自らを振り返ること（リフレクション）が有効であるとも述べている。加えて、我が国人材力強化に向けたアクションプランの中でも個人として取り組むべき方向性の中の1つにリフレクションの徹底とある。

学生たちが「人との関わり」の体験を通して学ぶことによって社会人基礎力が育成されることが前述のように示唆された。さらに2017年の「人生100年時代の社会人基礎力」の視点を踏まえると、その体験・経験を振り返ること（リフレクション）が重要になってくる。そのため看護基礎教育では、基礎ゼミ等での社会人基礎力育成を意図したプログラムでの学生自身の振り返りや、実習などでの社会人基礎力育成の視点での振り返りが重要であると考えられる。また看護学生3年生の半年間は、臨地実習であり睡眠や食事など自己の体調を整えることで自分の感情と向き合えることができることが重要である。そのため看護基礎教育における社会人基礎力育成は3つの要素の中でもストレスを含め感情をコントロールすることができる能力も必要である。そこで社会人基礎力育成を意図したプログラムや実習等の実施後に、社会人基礎力の3つの要素と12の能力要素に加え、良かった点やできた点などの肯定的な側面を自己認識（自己評価）していくことや「今後の課題」の認識、さらにそれらを踏まえた「次への目標」を考えリフレクションしていくことで、学生自身の自分の良さも含めたりフレクションとなり、感情の安定やコントロールにつながっていくのではないかと考える。また経済産業省の「人生100年時代の社会人基礎力」(図1)においても、中心軸に「リフレクション(振り返り)」が貫かれており、その力の育成が重要と考えられる。そして今後必要となる資質・能力として経済産業省の中小企業庁は、「新たな時代に必要とされている能力を踏まえて社会人基礎力を整理しておく必要がある。その際、就学前から社会人の学びまで、人生100年時代における教育・能力開発の各ステージの課題に対応した物とするべきである」と述べている。すなわち、体験・経験のリフレクションは、看護基礎教育のみならず卒業後も継続して課題に対応していくことが必要であると考えられる。たとえば、風間ら(2020)の研究によると、新人看護師にリフレクションシートを使って振り返る取り組みを行ったことで社会人基礎力に影響を与えられたと述べている。具体的には、2名の新人看護師にリフレクションシートを用いて、年2回の面接を行った結果、疑問や解決法をフィードバックできたことで「計画性」「創造力」が、自己の強みに気づくこ

とができたことで「傾聴力」が上がったことを明らかにしている。リフレクションシートを用いた面接は、自己への気づきを促すいい機会となりフィードバックできたことからリフレクションの意味づけにつながり、社会人基礎力の向上につながったと報告しており、学生時代のみならず卒業後も継続していくことで社会人基礎力育成につながると考える。

## V. まとめ

学校外での実習やアルバイト経験、学校内での演習やグループワークなど「人との関わり」が増えていくことが社会人基礎力を上昇させる要素の1つである。また、「人との関わり」の体験を通し、さらに「人生100年時代の社会人基礎力」の視点を踏まえると、その体験・経験を振り返ること（リフレクション）が重要である。

## VI. 今後の課題

社会人基礎力の向上を行うためには、学生の日々の体験に基づいたリフレクションをすることが大切であり、それを積み重ねることにより習慣化された考えの行動変容につながられるようにすることが大切である。そのため、看護基礎教育の中で行える学習や実習などで日々リフレクションできるようにさらに精査していく必要がある。

## 文献

- 市川裕美子・山野内靖子(2018). 看護学生の社会人基礎力の学年別自己評価と変化 八戸学院大学紀要, 56, 161-166.
- 奥田玲子・深田美香(2019). 看護学生の社会人基礎力の経年的変化と影響を及ぼす経験要因 米子医誌, 70, 13-24.
- 風間こまき・石井明子(2020). 社会人基礎力向上に向けた新人看護師との面接技法の検討ーリフレクションシート活用の効果を考察するー 第50回日本看護学会論文集看護教育, 75-78.
- 川上華代(2013). 現大学生の特徴と学生相談についてー考察: 問題や症状が維持され、変わらない学生の姿から見えてくるもの 和光大学現代人間学部紀要, 6, 141-153.
- 経済産業省・社会人基礎力に関する研究会(2006). 中間取りまとめ.  
[https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou\\_wg/pdf/001\\_s01\\_00.pdf](https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/001_s01_00.pdf) (2021年6月8日閲覧)
- 経済産業省・産業人材制作室(2017). 「人生100年時代の社会人基礎力」と「リカレント教育」. <https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinza/index.html> (2021年6月8日) 閲覧

経済産業省・中小企業庁. (平成 30 年). 「我が国産業における人財強化に向けた研究会」報告書.  
<https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/20180319001.html> (2021 年 7 月 18 日閲覧)

公益社団法人 経済同友会 (2015). これからの企業・社会が求める人材像と大学への期待～個人の資質能力を高め、組織を活かした競争力の向上～. [https://www.doyukai-internship.or.jp/pdf/internship\\_text.pdf](https://www.doyukai-internship.or.jp/pdf/internship_text.pdf) (2021 年 7 月 18 日閲覧)

小島尚子・河合のり子 (2017). 看護系大学生の社会人基礎力の属性別の検討 鳥根県立大学出雲キャンパス紀要, 12, 9-28.

滝島紀子・永井朋子 (2018). 地域包括ケアシステムに対応できる看護師の育成に必要なと考える教授内容－基礎看護学領域に焦点を当てて－ 川崎市立看護短期大学紀要, 23 (1), 25-34.

田中理子・山脇京子 (2020). 看護学生の臨地実習自己感及び職業的アイデンティティと社会人基礎力の関連 第 50 回日本看護学会論文集 看護教育, 23-26.

内閣府 (平成 16 年版) 少子化社会白書 (全体版), 2. 教育や児童の発達に関する影響  
[https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w2004/html\\_h/index.html](https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w2004/html_h/index.html) (2021 年 11 月 29 日閲覧)

中野妙子・永井由美子・山川正信 (2017). 看護系進路選択に必要な情報に関する研究 (第 2 報)－看護学生への調査から－ 大阪教育大学紀要, 65 (2), 27-33.

新野由子・糸井和佳・清野純子・大森美保・岡潤子 (2020).

学生の社会人基礎力の現状と教育方法の検討－看護学科 FD 研修会を通して－ 帝京科学大学紀要, 16, 45-52.

宮部 (森山) 明美・鈴木玲子・常盤文枝・山口乃生子・大場良子 (2017). 看護専門科目における PBL-T・TBL 混合型教育プログラムの評価 保健医療福祉科学, 6, 10-15.

山下省蔵 (2007). 「人間力」と「社会人基礎力」とは 工業教育資料・実教出版株式会社編, 311, 11-14.

山本幸子・田中万紀子 (2019). 看護学臨地実習が社会人基礎力に影響を及ぼす要因 第 49 回日本看護学会論文集 看護教育, 67-70.

山本十三代・阪上由美・田中結華・後閑容子 (2017). 在宅看護領域における統合看護学実習前後の「社会人基礎力」の変化と実践場面との関連 摂南大学看護学研究, 1 (5), 27-36.

若杉早苗・松井謙次・篁宗一・久間佐織・山村江美子・安田智洋・山本智子・松岡亜紀・柴田めぐみ・鮫島道和 (2016). 看護学部学生の学業とアルバイトに関する実態調査 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 24, 33-45.

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、ご指導頂きました大阪総合保育大学大学院 瀧川光治 教授に心から感謝申し上げます。

## 付記

開示すべき利益相反状態はない。



## Research Trends on the Development of Fundamental Competencies for Working Adults in Basic Nursing Education

Midori Takagi

*Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School*

The purpose of this study was to learn about the research trends on the development of fundamental competencies for working adults in basic nursing education by organizing the trends and issues of what kind of knowledge has been accumulated. Consequently, it was found that the students' fundamental competencies for working adults improved due to increased involvement with other people as they progressed through the grades and that taking some approaches, such as practical training or study content, had a certain effect. However, the results suggest that it is difficult to achieve a certain level of competence in all the competence components of the fundamental competencies for working adults only through study and a period of practical training. Therefore, it is necessary to consider learning and practical training methods intended to develop fundamental competencies for working adults. This study was examined an education method to develop fundamental competencies for working adults in basic nursing education based on the Ministry of Economy, Trade and Industry's "Essential competencies for the 100-year life" and the literature review.

**Key words** : basic social skills, basic nursing education

